

# プロサッカーチームを通じた地域活性化

1170484 三好 黎

高知工科大学マネジメント学部

## 1. 概要

近年、地域が抱える様々な問題対策に“スポーツ”が注目を浴びている。平成 23 年に文部科学省がスポーツ基本法を制定し、スポーツ立国の実現を目指すとともにスポーツに関する施策を総合的かつ計画的に推進する動きを見せた。4 年後に「東京オリンピック 2020」を控えた今、各自治体に留まらず国を挙げてスポーツ振興に一層力を入れていることは誰しもが感じているだろう。“スポーツ”と言っても様々であるが、本研究では「スポーツでもっと幸せな国に」を合言葉に、地域密着を目標とする「百年構想」を掲げている J リーグに焦点を当てる。サッカーが地域にどのような効果をもたらすのかを明らかにした上で、今日の高知県の社会現状と照らし合わせながらプロサッカーチームの存在意義を解き、その必要性を認知する。

## 2. 背景

現在、プロサッカーリーグである J リーグの参加チーム数は 53 (J1:18、J2:22、J3:13) となっている。地域密着型スポーツを理念としている J リーグが各地域に与える効果は大きい。少子高齢化による人口・労働者の減少が国の大きな課題の一つであると懸念されている中、経済効果数十億円と言われる J リーグは経済面以外にも地域コミュニティの場としてなど、多くの視点から問題緩和の役割を果たすと考えた。しかし、53 チームもありながら J リーグ加入クラブチームが存在しない県が、全国で 9 県 (内 4 県は JFL<sup>1</sup>加入クラブあり) となっている。高知県もその中に含まれる。

## 3. 目的

本研究は、プロサッカーチームが地域活性化の促進において、どのような役割を果たすのかを明らかにし、高知県での必要性を考える材料となることを目的とする。

<sup>1</sup> アマチュアチームにとって唯一の全国リーグであり、最高峰のカテゴリー。J リーグ (J3) と地域リーグの間に位置する。

## 4. 研究方法

本研究では、まず①既存のチームのデータや資料、先行研究をもとに J リーグが各地域に与える効果・影響をまとめる。そして、②高知県の社会現状を整理し、プロサッカーチームの存在意義を解く。また、③高知県で初の J リーグ参入を目指して活動中の高知ユナイテッド SC<sup>2</sup> (旧アイゴッソ高知) で、2 年以上にわたり行っているボランティア活動を通して、高知県のサッカー事情を考察する。

## 5. J リーグが地域に与える効果、影響

本研究では、高知県と同じ四国に位置する徳島県 (徳島ヴォルティス : J2)、愛媛県 (愛媛 FC : J2)、香川県 (カマタマーレ讃岐 : J2) の 3 チームを例とする。プロサッカーチームが存在することにより地域にどのような効果・影響があるのかを、すでに数値化されている既存データと各県民数十人に行ったアンケート調査をもとに分析していく。

### 5.1.1. 徳島ヴォルティス (徳島県)

1955 年に、大塚製菓のサッカー部として設立された徳島ヴォルティスは、徳島市、鳴門市、美馬市、板野町、松茂町、藍住町、北島町を中心に徳島県を拠点 (ホームタウン) とする J2 リーグチームである。

表 1 徳島ヴォルティスの年表

(出所：徳島ヴォルティス公式 HP をもとに筆者作成)

1955年	大塚製菓が徳島県でサッカー部を結成
1973年	全国社会人サッカー選手権大会で初勝利 天皇杯に初出場、初勝利
1977年	四国リーグ開幕
1985年	徳島県リーグに降格
1989年	四国リーグに復帰、4 度目の優勝 全国サッカーチャンピオンズリーグ決勝戦 (地決) で 2 位
1990年	日本サッカーリーグ (JSL) 2 部に昇格
1992年	ジャパンフットボールリーグ (旧 JFL) 1 部に参加
1999年	日本フットボールリーグ (JFL) に参加
2003年	JFL 優勝
2004年	JFL 優勝、J リーグ 2 部 (J2) に昇格
2005年	J2 リーグ参戦
2013年	J1 に昇格
2014年	J1 リーグ参戦を果たすも、J2 降格が決定
2015年	J2 リーグ 1 4 位
2016年	J2 リーグ 9 位

<sup>2</sup> アイゴッソ高知と高知 U トラスター FC の合併により 2016 年に設立されたチーム。

J2 参入を果たした 2005 年の経済波及効果は約 15 億 2000 万円だと、徳島経済研究所が発表した。直接効果は約 9 億 200 万円、間接効果は約 6 億 1800 万円となっている。この中には、ホームスタジアムである「鳴門・大塚スポーツパーク ポカリスエットスタジアム」の改修費も含まれているが、改修が終わったあとも 6 億円を超える経済効果があると推定される。また、J1 に昇格となった 2014 年シーズンは 10～15 億円の効果だと言われている。

表 2 徳島ヴォルティスの年別観客動員数

(出所：FootballGEIST 公式サイトをもとに筆者作成)

(年)	カテゴリー	(人)
2005年	J2	96,045
2006年	J2	83,452
2007年	J2	78,936
2008年	J2	81,093
2009年	J2	105,897
2010年	J2	83,057
2011年	J2	98,925
2012年	J2	83,808
2013年	J2	91,303
2014年	J1	151,034
2015年	J2	105,398

### 5.1.2. 愛媛 FC (愛媛県)

1970 年に創設された松山サッカークラブを前身とし、1995 年に愛媛フットボールクラブとして設立した J2 リーグチームである。ホームタウンは、松山市となっている。

表 3 愛媛 FC の年表

(出所：愛媛 FC 公式 HP をもとに筆者作成)

1970年	松山サッカークラブが誕生
1987年	四国リーグに昇格
1995年	株式会社愛媛フットボールクラブが設立
1996年	JFL 昇格を目指して動き出す
1998年	四国リーグで初優勝、地決で 3 位
1999年	四国リーグ優勝、天皇杯に初出場
2000年	四国リーグ優勝
2001年	JFL 昇格が決定
2003年	株式会社愛媛フットボールクラブが設立
2005年	J リーグ加盟が決定
2006年	J 2 リーグ参戦、9 位
2007年	J 2 リーグ 10 位
2008年	J 2 リーグ 14 位
2009年	J 2 リーグ 15 位
2010年	J 2 リーグ 11 位
2011年	J 2 リーグ 15 位
2012年	J 2 リーグ 16 位
2013年	J 2 リーグ 16 位
2014年	J 2 リーグ 19 位
2015年	J 2 リーグ 5 位、J 1 昇格プレーオフの進出が決定 昇格プレーオフ準決勝で C 大阪とスコアドローとなり、敗退
2016年	J 2 リーグ 10 位

いよぎん地域経済研究センターの調べによると、J2 に参入した 2006 年の経済波及効果は約 12 億 1000 万円で、内、直接効果は約 7 億 3600 万円、間接効果は約 4 億 7400 万円となっている。

表 4 愛媛 FC の年別観客動員数

(出所：FootballGEIST 公式サイトをもとに筆者作成)

(年)	カテゴリー	(人)
2006年	J2	99,334
2007年	J2	79,169
2008年	J2	77,775
2009年	J2	96,054
2010年	J2	78,945
2011年	J2	66,022
2012年	J2	76,201
2013年	J2	82,952
2014年	J2	80,228
2015年	J2	79,193

### 5.1.3. カマタマーレ讃岐 (香川県)

1956 年に、前身である香川県立高松商業高等学校のサッカー部出身者による高商 OB サッカークラブが誕生した。その後、2006 年にチーム名をカマタマーレ讃岐に改称し、2008 年に株式会社カマタマーレ讃岐が設立。高松市、丸亀市を中心とする香川県全域をホームタウンとする J2 リーグチームである。

表 5 カマタマーレ讃岐の年表

(出所：カマタマーレ讃岐公式 HP をもとに筆者作成)

1956年	高松商業高校OBサッカークラブが誕生
1977年	第 1 回四国リーグに参加
1991年	第 48 回国民体育大会の県指定強化チームとなる
1994年	四国リーグで初優勝
1996年	天皇杯に初出場
1997年	四国リーグ優勝
2005年	J リーグ入りを目指して動き出す
2006年	チーム名をカマタマーレ讃岐に改称し、 カマタマーレスポーツクラブを設立
2008年	四国リーグ優勝、地決予選リーグ敗退 株式会社カマタマーレ讃岐を設立
2010年	四国リーグ優勝、地決優勝 西日本社会人大会優勝、社会人選手大会優勝 JFL への入会が承認される
2011年	JFL リーグ 11 位
2012年	JFL リーグ 4 位
2013年	J 2・JFL 入れ替え戦で勝利、J 2 昇格が決定
2014年	J 2 リーグ 21 位
2015年	J 2 リーグ 16 位
2016年	J 2 リーグ 19 位

百十四経済研究所によると、J2 に参入した 2014 年の経済波及効果は約 7 億 4000 万円で、内、直接効果は約 4 億 5000 万円、間接効果は約 2 億 9000 万円である。

表 6 カマタマーレ讃岐の年別観客動員数

(出所：FootballGEIST 公式サイトをもとに筆者作成)

(年)	カテゴリー	(人)
2014年	J2	69,664
2015年	J2	76,824

### 5.2.1. アンケート調査

J リーグが定めている「J リーグ規約」には、本拠地であるホームタウンで、地域社会と一体となったクラブづくりを

行い、サッカーの普及・振興に努めなければならないことが記されている。「地域に根差したスポーツクラブ」を目指すJリーグにとってホームタウン活動は最も重要であると言えることから、どのチームもサッカー教室の開催や清掃活動、地域イベントへの参加など積極的に取り組んでいる。

では、実際に地域の人たちは、自分の県にプロサッカーチームが存在していることやそのチームの活動について、どのように感じているか全15問程度の簡単なアンケート調査を行った。本研究では、各県の出身者を対象に、訪問留置調査およびインターネット調査の2つの方法を用いて実施。

### 5.2.2. 調査結果

3県共通して、ほぼ全員がサッカーの好き嫌いに関係なくプロサッカーチームの存在を認識しており、半数以上が経済、コミュニティ、地域活性の3つの面でチームが貢献していると感じているという結果になった。

また、「プロサッカーチームが身近にあることで子供たちがスポーツを知る・始めるきっかけをつくれる。そして、夢や希望、目標となり良い影響を与えることができる」、「対戦相手によっては、多くのアウェイサポーターが来るため観光地や飲食店が賑い、経済効果がある」という意見が寄せられた。しかし、訪問留置調査を行った際に「チームは知っているが、サッカー自体に興味がない。貢献しているかは知らない、わからない」という声もたくさんあった。「わからない」ことについて、「スタジアムが街の中になからその経済効果に気付いていない人が多い。他県からアクセスしやすい市内中心部にスタジアムがあれば、より集客も増え、プロサッカーチームがあることの効果の大きさを感じやすい」という意見が繋がると考えられる。また、3県に行ってみて、ホームスタジアム周辺にはチームののぼりなどが多くあり一体感を感じたが、少し離れるとホームタウンであってもチームの色は感じられなかった。

アンケート調査では、プロサッカーチームが地域に与える効果と影響、そして、さらなるサッカーの普及という課題を得ることができた。

## 6. 高知県の現状と課題

まず、運動・スポーツについてだが、小・中学生の全国体力・運動能力・運動習慣等調査を見てみると、2016年の時点で過去に比べ向上が見られるものの1週間の総運動時間が少

ない子供が全国平均よりも多く、運動習慣がきちんと定着していない現状である。また、成人女性のスポーツ実施率が男性に比べ低い。次に、高知県庁が行っている県外観光客入込・動態調査をもとに県外からの観光客数を見た。平成25年～平成27年の3年間は連続で400万人超えを達成しているものの、ここ数年ほぼ横ばいとなっている。高知県のイベントに着目してみると、よさこい祭りや豊穰祭、龍馬マラソンなどが挙げられるが、どれも一時的なもののばかりである。また、毎年行われているJリーグチームの高知キャンプや試合を目的に訪れる人も多い。しかし、その半数以上が観光はせずに帰るというデータがある。1年を通して高知県を訪れてもらうためのきっかけづくりや観光案内の充実が必要で、「高知家」を掲げる高知県にとっても県民の一体感という面で改善していく必要があると考えられる。そして、大きな課題とされている少子高齢化は進むばかりで人口は年々減少している。UターンIターンを増やすためにも、高知県の魅力を広めていかなくてはならない。

以上の現状課題は、プロサッカーチームが与える効果や影響によって改善が期待できると考えられる。

## 7. 高知ユニテッドSC

高知県から初のJリーグ入りを果たすために、高知県で1位2位を争っていた高知UトラスターFCとアイゴッソ高知が合併して、2016年に設立された四国リーグ所属の社会人チームである。アイゴッソ高知が設立された2014年から、インターシップをきっかけにボランティア活動を行い、試合時の会場設営やイベント、講演会に参加しながら継続的な観察を行った。チーム体制の不備が課題とされていたが少しずつ改善に向けて動き始めている。下部組織、育成事業にも力を入れ、昨年ジュニアユースが発足された。その他にも、サッカー教室や地域イベントへの参加、清掃活動など積極的に取り組んでいる。2016シーズンは2位という成績で終わったものの、今治戦では観客数が2000人を超える結果となった。

そこで、観客数を2000人、費用の内約を表7.8のように仮定して経済効果（高知県・愛媛県合わせて）を算出してみた。結果、四国リーグでの今治戦1試合の経済効果は約1000万円となる。観客動員数は経済効果に大きく影響することから、サポーター数、対戦相手も重要となり、上に上がることで更なる経済効果が期待できると考えられる。

表7 今治側の費用内約

(出所：筆者作成)

<b>今治側</b>
バス費用5万+燃料費1万×2
チーム関係者飲食費等1000円×40
サポーター飲食費等2000円×760
サポーター高速・燃料費1万840円×400

表8 高知側の費用内約

(出所：筆者作成)

<b>高知側</b>
チーム関係者燃料・飲食費等3000円×40
サポーター飲食費等2000円×1000
サポーター・見学送迎燃料費2000円×780
見学(学生)飲食費等1000円×160

しかし、観客数が増えれば運営側の人手も必要となってくる。これはJ1～J3、JFL、JFLを目指すチームにとってはとても重要なことであるため、プロサッカーチームには多くのボランティアスタッフが存在する。各チームとともにホーム戦を盛り上げ、地域のために活動するという役割である。応援するだけではなく、チームと地域の人が協力し合うことで新たな一体感が生まれイメージアップにも繋がると考えられる。現在、高知ユナイテッドSCのボランティアスタッフはわずか3人という厳しい状況である。活力のある学生に向けて、講演会や説明会を開くなど地道な募集活動も行っていない。

## 8. 結論

プロサッカーチームが地域に与える効果・影響と、高知県が抱えている課題を照らし合わせることで、プロサッカーチームの存在意義が明らかとなった。

しかし、Jリーグに上がるためには県や地域の支え、応援が絶対不可欠である。プロサッカーという存在が持つ魅力で高知県の活性に貢献したいと戦っているチームがあることを知っていてほしい。また、高知県にはプロサッカー選手を目指す子供たちがたくさんいる。実績を積んだ指導者のもとで学べる環境は、子供たちにとって夢に繋がる一歩でありパワーとなる。これからの将来を担う子供たちの可能性は、県にとって希望であるとも言える。そのためにも、年齢性別に関係なく一人でも多くの県民がサッカーと触れ合えるきっかけをつくっていかなくてはならない。それは、サッカーのみならずスポーツの普及・振興にも繋がると考えられる。

本研究では、四国3県のプロサッカーチームを例に考察してきたが、どのチームもいきなりJリーグに上がったわけではない。現在高知ユナイテッドSCも所属している四国リーグから始まり、地道に努力してきたからこそ今がある。しかし、上に上がれば上がるほど様々な壁に直面するだろう。だからこそ、現段階からしっかりと土台作りが重要となる。チームの認知度向上の施策もただポスターを貼り地域イベントに参加するだけでは弱いことが明らかとなった。知名度ではなく認知度が上がるPRが重要となる。高知ユナイテッドSCはラジオ放送でコーナーを持つなどメディア戦略も行っている。最後に、スタジアムである春野陸上競技場は決して立地条件が良いとは言えない。だが、同じようなスタジアムの課題を抱えながらも観客動員数が多いチームは少ない。スタジアムの設立は容易ではないからこそ、時間・体力・費用を使ってでも行きたいと思える魅力を感じれるホーム戦にしていかななくてはならない。高知県には、チームと高知県が一体となることでその魅力を作り出す可能性が十分にある。そのためには、チームとともに高知県を盛り上げてくれるボランティアスタッフの増員が施策であると考えられる。

## 【参考文献】

- 「スポーツ基本法」「第2期高知県教育振興基本計画」文部科学省HP <http://www.mext.go.jp/>
- 「県外観光客入込・動態調査」高知県庁HP <http://www.pref.kochi.lg.jp/>
- JリーグHP <http://www.jleague.jp/>
- 徳島ヴォルティスHP <https://www.vortis.jp/>
- 愛媛FCHP <http://www.ehimefc.com/p/index.html>
- カマタマーレ讃岐HP <http://www.kamatamare.jp/>
- 高知ユナイテッドSCHP <http://kochi-usc.jp/>
- FC今治HP <http://www.fcimabari.com/>
- 徳島経済研究所HP <http://www.teri.or.jp/>
- いよぎん地域経済研究センターHP <http://www.iyoirc.jp/report/>
- 百十四経済研究所HP <http://www.114eri.or.jp/>
- FootballGEISTHP <http://footballgeist.com/>